

吹田市立博物館開館25周年記念

平成29年度(2017年度)秋季特別展

北大阪のまつり

—まもりつたえる心—

会期 平成29年(2017年)10月7日(土)～11月30日(木)



長谷・八坂神社御田植え(能勢町)



天王の Kitsune Gageri (能勢町)



神田八坂神社の額灯(池田市)



瀧安寺富会の富くじ箱
(箕面市)



熊野田八坂神社の台額
(豊中市)



山田伊射奈岐神社の太鼓神輿
(吹田市)



江坂素盞鳴尊神社の太鼓御輿
(吹田市)



ヒアゲ(上音羽・忍頂寺)(茨木市)



原八坂神社の春祭歩射神事
(蛇祭り)(高槻市)



尺代諏訪神社のお頭(島本町)

北大阪の神饌^{しんせん}

神仏などに献納される供物の中で神に献ぜられる飲食物を神饌といい、生ものの生饌と調理した熟饌に大別されます。神饌はその土地の収穫物が献じられるため、その種類や調理法、供え方に地域的な特徴がみられるものでしたが、明治期に祭りの作法が一般化され、生饌が一般的になり、地域性が失われていきました。しかし、これまでの地域の伝統を保つ神饌は特殊神饌といわれ、北大阪地域においても特殊神饌を調製献納する伝統は守り伝えられています。ここでは当地の代表的な神饌の姿を紹介します。

茨木市の山間部では2月に「オトウ」とよばれる行事があり、生保の諏訪神社ではもち米5升を蒸して大きさの異なる3種類の白むしを作ります。宝珠型の最も大きなものは「オタイショウ」といわれ、1つ、中ぐらいのものは「ケンゾク」といい、同じく宝珠型で9つ、小さなものを「マンジュウ」あるいは「カラス」と呼び2つ作ります。「オタイショウ」には大きな箸、「ケンゾク」「マンジュウ」には小箸11本が添えられます。他には短冊型に切った大根、人参、栗、榎の実、ミカン、酒、甘酒が供えられます。

大岩の大歳神社では、白むしをビワの葉で包み紅白の水引でくくったものや鏡餅、洗米をすりつぶしたシトミ（^{しとぎ} 粢）を調製し、ここにクロモジで作った箸1組と楊枝10組を添え、新芽の梅の枝をもって神社へ奉納します。

^{くるまつくり}車作の皇大神宮では、もち米を蒸して三角形に固めた白むしをモツソといい、これを2つと大根、人参、牛蒡、メザシを半紙で包んだものを4柱の神前に供えます。

茨木市ではオトウ以外でも道祖本の道祖神社では12月10日のサイノトウで特殊神饌がつけられます。米1升の白むしを丸めた日輪。もち米1升を蒸して丸く盛った月輪。さらにお馬の豆（大豆2合を煮る）。焼き鯛。ごりん（ゆでてすりつぶした小豆と里芋を混ぜたもの）。お平（山芋、

人参、大根、牛蒡、かまぼこの蒸しもの）。うすあげ、^{ぬぎ}葱、大根の味噌汁。大根、人参の千切り、干し柿とかまぼこの^{なます}膾の上に^{たこ}蛸の足2本とみかん半分を供えます。

高槻市では安満の^{あま}磐手杜神社で行われる馬祭りにおいて、かつて当屋の家に神を迎えるために松、わら縄、竹、芝生、土を用いて設けられたオダンにモツソウ（白むしと赤飯）を供えました。

吹田市では岸部の吉志部神社のどんじ祭りで供えられる神饌はもち米を蒸した白むしが主食とされ、副食が小判型の小判餅（舌餅）と茄子、栗、柿、小餅を串に刺した菓子です。

このように北大阪地域では白むしを主たる神饌とする例が多いことに地域性がみとれます。同じ米の加工品である餅はお供えとしては一般にはよく知られたものですが、鏡餅程度で、特殊なものはどんじ祭りの小判餅ぐらいで、白むしにくらべると神饌としての位置づけは大きくありません。さらに蒸さずについた^{しとぎ}粢も少数ですが、茨木市の大岩にみられ、火を用いず調理する餅に先行する古い神饌の姿を伝えています。

供える容器は三方、折敷が一般的ですが、どんじ祭りでは白むしを丸い木の台に割竹を円柱や円錐状に立て、その中に半紙と真菰で包んだ白むしを入れ、上部にも^{ざる}箆に盛った白むしを置き、かわらけで蓋をし、さらに周囲を真菰で巻いた特殊な容器を用いています。真菰は神事によく用いられ、神饌を清浄に保つ聖なる植物を使った古式がうかがえます。

神饌が祭りの名称ともなっているのがどんじ祭りです。「どんじ」の語は平安文学にも散見している強飯^{こわめし}を握り固めた「屯食^{とんじき}」が転訛したもので、白むしを丸くした「屯食」を神にお供えするのが祭りの最大の主眼であったために神饌の名が祭りの名になった例といえます。

（当館副館長 藤井裕之）



オタイシヨウ（茨木市生保）



オダンに供えられた神饌（高槻市教育委員会提供）



ビワの葉で包んだ白むし（茨木市大岩）



どんじ祭りの白むし



皇大神宮の神饌（茨木市車作）



どんじ祭りの小判餅



道祖神社の神饌（茨木市道祖本）



どんじ祭りの菓子

北大阪の獅子舞

北大阪には文化財に指定された獅子舞が5つあり、大阪府内では獅子舞が比較的によく伝承されている地域といえます。5つの獅子舞はその特徴から3つのタイプに分類することができます。

第1は獅子が神の化身とされ、魔を祓い、祭りにおいて主要な役割をになうものです。豊中市桜塚に鎮座する原田神社は主祭神がスサノヲノミコト（牛頭天王）で、獅子舞は10月1日～10日までの秋の大祭で奉納されます。獅子は氏子から親しみをもって「オテンサン」や「オテンノウサン」と呼ばれ、この名は祭神の牛頭天王からきているものと解されます。まず10月1日の舞初式では境内の石舞台において2人で獅子を操るネマイ（ホンネマイ・ハヤネマイ）が舞われます。2日目以降は地区巡祭で氏子の地域を回って舞いによって悪疫退散を行います。9日の宵宮には石舞台でネマイの後、獅子追い神事がおこなわれ、獅子は氏子に囲まれ氏子達の間を頭を上下に激しく動かしながら駆け抜けてゆくタツオイと歩幅を短く速く歩くチドリノマイを繰り返しかけまわります。神事において獅子と氏子が間近に接することが特徴といえます。

同様のものに豊中市熊野町（旧熊野田村）の八坂神社の獅子神事があり、10月6日の六日祭には、渡御先の熊野田中央会館や氏子の家々で舞う、御舞渡御が行われます。宵宮では、巨大な額状となった行灯（台額）と宮入りし、まずハヤネマイの後、獅子追い神事となり、台額の間を獅子がチドリマイを舞います。その後再び宮入りとなり、チドリマイで少しずつ拝殿へ進んだ後、一気に拝殿に駆け込み神事は終了します。熊野田村では江戸期までは原田神社の氏子圏であり、原田神社の獅子神事の影響で八坂神社の獅子舞は形作られたと考えられます。台額とオテンサンの獅子追い神事が一体となっていることも特徴のひとつです。

第2は伊勢大神楽の影響を受けた獅子舞です。

吹田市西の庄に鎮座する泉殿宮の祭礼に奉納される神楽獅子の主演目は「神前」といわれ、2人1組となって1人が相手の肩の上に立って、二階になり、剣や鈴と御幣を持ち、神前の四方を祓うものです。また、一階の獅子4頭が噛み合わせを行い、乱れ舞う乱舞があります。二階になるところから二階獅子ともいわれ、その芸態は曲芸的な要素が取り入れられた伊勢大神楽の影響がうかがえます。伊勢大神楽は伊勢国桑名郡太夫村（現三重県桑名市太夫）を本拠地とし、江戸初期から各地を巡回していた芸能集団で、その芸態には獅子舞の獅子神事と曲芸があります。神楽獅子でかつて行われていた「女形の道中」といわれる扇子を鏡や櫛に見立て化粧の所作をする舞は大神楽の「魁曲」の影響を思わせます。

第3は第1と第2の両方の特徴をあわせもつもので、能勢町の山辺に鎮座する山辺神社の獅子舞と野間出野の獅子舞がこのタイプといえます。

山辺の獅子舞は山辺神社の秋祭礼に奉納され、雌雄2頭の2人立ち獅子で、舞いの種類には扇の舞と剣の舞があり、前者は太鼓・すり鉦・笛ではやし、幣と鈴、扇で優雅に舞うもので、扇をもって舞うしぐさに伊勢大神楽の魁曲の影響が少し垣間見えます。後者は近くの剣尾山にすむ魔物の大鷲と剣をもって戦い、傷つきもがき苦しむ舞といわれ、舞には実拾い、太刀舞、のたうちなどの独自の動作がみられ、伝承をからめた魔を祓う獅子本来の姿がみてとれます。

野間出野の獅子舞は野間出野の氏神岩崎神社の秋祭礼に奉納され、神社境内で演じられます。その他、4年に1度の野間神社の大祭でも地黄陣屋、御旅所、野間神社などで舞われます。2人立ちの獅子舞で、由来は能勢頼次が関ヶ原の戦いの後、徳川家康の旗本となって能勢に帰国した時、領民が喜び、氏神に武運と豊穡を感謝して獅子舞を奉納したとされます。はじめは眠っている獅子がやがて目覚めて氏子のかけ声と動

きに呼応して怒り狂ったように舞う動きには氏子と身近に接しながら、魔を祓う第1のタイプの要素がみえます。また、時々みせる肩車で前



原田神社の獅子舞（豊中市教育委員会提供）

の獅子頭を持ち上げて場所移動をしたり、二階になるところは第2の伊勢大神楽の影響もうかがえます。（当館副館長 藤井裕之）



八坂神社の獅子舞（八坂神社提供）



泉殿宮の神楽獅子



山辺神社の獅子舞（中植重治氏撮影）



野間出野の獅子舞（能勢町教育委員会提供）



伊勢大神楽の各組による魁曲（澤井浩一氏撮影）

参考文献

大阪府教育委員会『大阪府の民俗芸能－大阪府民俗芸能緊急調査報告書－』2009年
『新修豊中市史第7巻 民俗』2003年

「お祭り広場」って何だろう？ —大阪万博秘話

大阪の北方、千里ニュータウンの傍に万博記念公園があり、そこにひと際目立つ、お化けのような「太郎タワー」が立っている。そしてその辺りをお祭り広場跡という。その「お祭り広場」とはいったい何だろうか？

今から53年前の夏、長く辛かった戦争を忘れるかのように、日本中は「東京オリンピック」に沸いていた。ところがそのとき、もう一つの国際文化イベントである万国博覧会の大阪開催を目指して通産省を通し、密かにパリ国際博覧会協会に働きかけていた文化人グループがあった。建築家の浅田孝、建築評論家の川添登、文化人類学者の梅棹忠夫、SF作家の小松左京らである。その彼らの運動が功を奏して、翌年春、パリ国際博覧会協会は1970（昭和45）年に大阪で万博を行うことを決定したのである。

そのニュースが日本に伝わったとき、寝耳に水の関西人はびっくりした。「万博って一体何や？」。しかし、もう時間がなかった。その会場が千里ニュータウンの隣接地と決まったため、早速、大阪府・市を中心とする対策事務局が作られ、その何人かの役人が、たまたまその年の一月に京都大学建築学科の助教授に赴任した私のところにやって来た。というのも、私はそれまでの約10年間、建設省住宅局にいて日本のニュータウン建設に取り組んでいたのだが、私のところへ来られた人々はその関係者たちで、彼らは万博の準備を命じられたものの万博が分からず、元中央官僚の私のところに助けを求めにきたのだった。しかし万博は通産省の所管で建設省の知るところではない。そこで「万博の調査を始めては？」と提案したところ、その調査を私がやらされることになった。

そこで私は京都大学建築学科内の京大建築会に勧進元を依頼し、私の直属の教授の西山卯三氏を責任者として、京大を中心として私の知る限りの関西の知識人・学者を総動員し「万博とは何か」というA4判300頁の報告書を3か月余りで作り上げた。ために私は生涯初めて、3日完全徹夜なるものを数回やった。34歳の「若さの暴走」だった。

しかし、大阪府・市を始め多くの市町村、マスコミ、企業、学校などにその報告書が配られた結果、万博の趣旨が次第に理解されていった。単なる産業博覧会などとは違い「人類はどうあるべきか」ということについての特定のテーマを持って各国、各企業が出展するものだ、ということである。その大阪万博のテーマもやがて「人類の進歩と調和」と決まった。後は会場計画委員会が作られて、会場計画の原案作成者を決めるだけとなった。

そうしたその年の12月末に会場計画委員会が開かれることになり、その直前に私のところへまた府・市の担当者がやってきて「会場計画の原案作成者をぜひ関西から出してほしい」と懇願した。しかし懇願されても私は先の「調査報告書」をまとめ上げたに過ぎず、名目上の編者は西山教授であり、ために西山教授は会場計画委員になったが、私は会場計画委員でも何でもない。大学の一助教授に過ぎず何もできる立場にない。しかも会場計画委員会委員のメンバー表を見ると、西山教授のほかに、西山教授が委員になったためか下馬評では有力だった先の浅田孝氏の名が消え、代わりに東京オリンピックで数々の施設の設計で有名になった丹下健三東京大学教授が入っている。そして会場計画委員会は、原案作成者をこの西山・丹下の二人のどちらにするかで懊悩している、というのである。

そこで私は言った。「それなら、西山卯三さんと丹下健三さんのお二人に共同設計をお願いしては？ お二人ならきっとできるでしょう」。私がこのお二人なら共同設計ができるだろうと思ったのは、お二人は建築家とはいえその業績が余りにも違うからだ。丹下さんは正真正銘の世界の建築家だが、西山さんは建築家とはいえその実質のお仕事は都市計画や国土計画である。しかしそういう内実はともあれ、これは絵の巨匠のピカソとマチスに共同制作をお願いするようなもので果たしてそんなことができるのだろうか？ 府市の担当者たちは不安げな顔をして帰っていった。

しかし、その数日後に先の会場計画委員会が開

かれ、その席上、丹下健三さんが「西山さんとならうまくやれるでしょう」と言って西山・丹下の共同設計案を了承されたのである。私のアイデアは採択されたのだった。

それから1か月後の節分の夜、丹下さんの申し出により東京のホテル・ニューオータニの特別室で、西山さんと丹下さん、それにお忙しい両氏の代理人として私と丹下さんのお弟子の建築家の磯崎新さんの合計4人が、会場計画のやり方について具体的な相談を行うことになった。その席上、丹下さんはこう提案された。「西山先生。会場計画の原案を先に、つまり設計期間の前半に自由におやりください。ただし後半を私にやらせてください。そのとき30パーセントだけ変更をお許しください」。これは、お二人が純粹の芸術家だったら誰が聞いても腰を抜かすような提案だろう。それを丹下さんが言い出され、西山さんも了承された。つまり私の突飛なアイデアが日の目に向かったのである。

そこで会場計画の前半をやることになった西山さんは私に「万博会場を未来都市のモデルにするから、中心に広場を置く案を描け」といわれた。しかし私は「羽仁五郎さんも『都市の論理』でいわれる通り、日本の都市には広場の伝統がありません」と答えたが「なかったら新しく作れ」といわれた。私は咄嗟に「お祭りのときの広場ならあります」と答えたら「それでいい」といわれた。

私がそう答えたのも、東京から京都に向かって出来たばかりの新幹線に乗って京大に赴任したとき、国土の山野に無数の鎮守の森を「発見」したからだ。それまでニュータウンばかり手掛けていた私は、そういう伝統の存在にビックリした。

そこで京大に来て学生たちと各地の鎮守の森を調査したところ、その多くが祭の時に神輿の御旅所になる「小広場」をもっていることを知った。そこで祭のイベントが行われる。その素晴らしいものに小豆島の亀山八幡宮のお旅所があった。広場の周囲に大きな石が7、8段も連続して立ち並び、まるでギリシャの野外劇場の観覧席のようだ。私はそれを基に原案を描いた。そういうことがあって、西山さんの前半の案は「お祭り広場を持つ未来都市」となった。

後半は丹下さんがそのお祭り広場案を引き継ぎ、そこに六角形ユニットの鉄骨の箱を無数に連続させた、航空母艦のように巨大な「カマボコ板の屋根」を掛けられた。そして私に「その下にそれに見合う観覧席、広場、地下空間などを設計しなさい」と命じられたのである。西山さんが途中で設計を降りられたため、代わりに、たいして建築デザインの実績もない私を抜擢していただいた。丹下さんは西山さんとの約束を守られたのであった。私は感激してその任に当たった。なお、また丹下さんは別に岡本太郎さんという画家にシンボルとなるタワーの設計を依頼された。これも岡本さんは彫刻家でもなかったのにその大任を見事に果たされた。そうしてそれはお祭り広場のシンボルになった。

こうして出来上がったお祭り広場は大阪万博の花形となり、連日連夜、そこで世界の祭りが行われ、当初の予想を大きく超えて万博史上最高の6400万人もの観客を集めた。お祭り広場の案が発表された当初、万博運営を所管する通産省が「万博は産業技術の博覧会だから、お祭りをやりたかったら文部省に頼め」と異議を唱えたが、後には黙ってしまった。

このような大阪万博は何から何までが異例づくめの一大イベントだった。そんなことが許されたのも、敗戦に打ちひしがれた当時の日本人が、まなじりを決して日本文化を持って世界に立ち向かおう、という強い意欲があったからだろう。

西山・丹下・岡本さんらもなくなられた今となつては遠い思い出である。

(元大阪大学教授 上田 篤)



お祭り広場（写真提供：大阪府）

吹田市立博物館開館25周年記念 平成29年度(2017年度) 秋季特別展 北大阪のまつりーまもりつたえる心ー 関連イベント

●オープニングイベント

10月7日(土) 午後1時～2時

開会式 展示解説

10月7日(土) 午後2時30分～4時

「大和ことばで解く日本のまつり」

講師 / 中牧弘允(当館館長)

●歴史講座(いずれも先着120名)

10月15日(日) 午後2時～3時30分

「北大阪のまつり(三島地区編)」

講師 / 藤井裕之(当館副館長)

11月12日(日) 午後2時～3時30分

「北大阪のまつり(豊能地区編)」

講師 / 藤井裕之(当館副館長)

●講演会(いずれも先着120名)

10月21日(土) 午後2時～3時30分

「祭の中の神賑かみにぎわいー御迎提灯と太鼓台のルーツを
探る」講師 / 森田玲氏(玲月流初代・篠笛奏者)

10月29日(日) 午後2時～3時30分

「写真家三村幸一の撮った北大阪のまつり」

講師 / 黒田一充氏(関西大学教授)

11月3日(祝) 午後1時30分～3時

「『お祭り広場』って何ですか? ー大阪万博秘話」

講師 / 上田篤氏(元大阪大学教授)

11月23日(祝) 午後2時～3時30分

「北大阪の正月行事」

森成元氏(大阪府教育庁文化財保護課専門員)

11月25日(土) 午後2時～3時30分

「愛宕信仰の変遷と伝播ー軍神から火伏の神へ」

講師 / 八木透氏(佛教大学教授)

●「北大阪のまつり」ビデオ上映会(いずれも午 後1時30分～3時30分 先着120名)

上映後展示解説(展示解説は観覧料が必要

11月19日(日)は除く)

10月28日(土)

高槻市・島本町編 講師 / 藤井裕之(当館副
館長)

11月4日(土)

吹田市・摂津市・茨木市編 講師 / 藤井裕之(当
館副館長)

11月11日(土)

豊中市編 講師 / 藤井裕之(当館副館長)

11月19日(日)

箕面市・池田市編 講師 / 藤井裕之(当館副
館長)

11月26日(日)

能勢町編 講師 / 藤井裕之(当館副館長)

●館長ギャラリートーク(観覧料が必要)

10月8日(日) 午後2時～3時

●北大阪ミュージアム・ネットワークシンポジ ウム(先着120名)

11月5日(日) 午後1時～5時

「北大阪のまつり」

コンサート(先着120名)

10月22日(日) 午後2時～3時

和太鼓演奏(郷土サークル野火)

展示室クイズラリー

11月18日(土) 午前10時～午後4時

11月19日(日) 午前10時～午後4時

博物館ボランティア有志の会(景品あり 随時受付)